

引用文献

青木淳一, 1973. 土壤動物学. 814pp. 北隆館.
 青木淳一, 1978. 打込み法と拾取り法による富士山麓青木ヶ原のササラダニ群集調査. 横浜国大紀要. 4(1): 149-154.
 青木淳一, 1983. 三つの分類群の種数および個体数の割合によるササラダニ群集の比較 (MG P 分析). 横浜国大紀要. 10: 171-176.
 青木淳一, 1994. 仙石原湿原の土壤動物調査. 仙石原湿原実験区植生復元事業実験調査報告 (第4報). 47-77.
 Fisher, R. A., Corbet, A. S. and Williams, C. B., 1943. The relation between the number of species and the number of individuals in a random sample of a animal population. *J. Anim. Ecol.* 12: 42-58.
 平内好子・佐藤卓・松村勉, 1997. 富山県大山町ブナ林における土壤動物 (ササラダニ類) と落葉量の関係. 富山の生物. 36: 17-26.
 栗城源一, 1974. 尾瀬湿原における中型土壤動物. 福島生物. 17: 22-27.
 栗城源一, 1977. 湿原に生息するササラダニ. 福島生物. 20: 13-17.
 栗城源一, 1995. 谷地平湿原におけるササラダニ群集構造の特徴と変動. *Edaphologia* 54: 13-23.
 栗城源一, 1996. 湿原の開田および耕作放棄に伴う土壤動物とくにササラダニ群集の変遷. *Edaphologia*. 57: 37-46
 Kuriki, G., 1998. Vertical Distribution of Oribatide Mites in Akaiyachi Moor, Northeast Japan. *Edaphologia*. 60: 11-16.
 栗城源一, 2000. ミズゴケ湿原に生息するササラダニ類の生態. 日本生態学会誌. 50: 141-153.
 Kuriki, G., 2003. Studies on the Oribatide Mites in *Sphagnum* Mires in Northern Japan I. General Features of Oribatid Fauna in *Sphagnum* Mires. *Edaphologia*. 73: 27-43.
 栗城源一, 吉田勝一, 1998. 尾瀬地域における各種植生下のササラダニ相. 尾瀬の総合研究尾瀬総合学術調査団. 667-690.
 Kuriki, G. and Yoshida S., 1999. Faunal Study of Oribatide Mites in Ozegahara in Central Japan in Relation to Vegetation Type and Soil Moisture. *J. Acarol. Soc. Jpn.* 8(1): 27-40.
 松村勉・平内好子・小川徳重・佐藤卓, 1998. 富山県魚津市平沢トチノキ林の森林構造とササラダニ類. 富山市科学文化センター研究報告. 21: 15-21.
 大西純, 1980a. 釧路湿原ミズゴケ帯のササラダニ. 釧路市立郷土博物館紀要. 7: 7-10.
 大西純, 1980b. 霧多布湿原とその周辺のササラダニ相. 霧多布湿原及びその周辺の科学調査報告書. 道東海岸線総合調査団. 25-28.
 大西純, 須摩靖彦, 1973. 釧路湿原の土壤動物. 釧路湿原総合調査報告書. 215-226.
 佐藤卓・平内好子・野口泉, 2004. 富山県平村相倉トチノキ林の森林構造とササラダニ類. 富山市科学文化センター研究報告. 27: 61-67.
 佐藤卓・平内好子・野口泉・松村勉, 2005. 富山県上市町眼目と大松のモミ林の森林構造とササラダニ群集. 富山の生物. 44: 27-38.
 吉田勝一, 栗城源一, 1998. 尾瀬ヶ原湿原の土壤小型節足動物—とくにササラダニ群集について. 尾瀬の総合研究 尾瀬総合学術調査団. 657-666.

南の島にワラジムシを求めて9-甕島-

布村 昇

富山市科学文化センター

〒939-8084 富山市西中野町1-8-31

Short collecting trips to the subtropical islands-9

Noboru Nunomura

Toyama Science Museum, Nishinakano-machi, 1-8-31,

Toyama-shi, Toyama, 939-8084, Japan

本年夏は極めて多忙な日程で、富山を脱出することは難しかったが、どうしても南の島へ行きたかった。今まで一度も言ったことのない南の島として、鹿児島県の甕島を選んだ。夏休み中は多忙で出られないし、9月の議会が始まると出られない。そこで、8月31日から9月3日の週末という微妙な時期を選んだ。台風が来たらいっぺんに計画が吹っ飛ぶと思ったが、幸い台風は日本付近になかった。

8月31日の夕方、富山空港から東京を経て、鹿児島に飛ぶ。富山は順調だったが、東京地方に地震があり、飛行機が乱れた。鹿児島にはかなり遅



地図. 甕島列島

く到着し、市内への連絡バスも最終便でしかも遅れ、夜遅く、すごい土砂降りの中、天文館にあるホテルにたどり着いた。

上甕島・中甕島

時刻表によると串木野港へのバスが出る場所ということで、繁華街の天文館を選んだが、ホテルの係員がバスのことについてもまったく分らないという。かなりの雨であり、調べに行くのも大変で、採集道具をホテルに送ったこともあり、大きな荷物を抱えての出発となった。翌朝早く起き、鹿児島中央駅までタクシーへ行き、串木野まで鉄道、串木野駅から港まで再び、タクシーを利用した。

串木野新港から高速船で1時間の航海で上甕の里港へ着いた。あった。港についてまず頼んであったレンタカー屋まで、重い荷物3つも運んで行ったが、レンタカー屋自体が港近くのビルに引越していた。そのことを告げられていなかった。車で港まで送ってもらい、手続きをしてレンタカーをやっと借り出発した。

はじめにどこに行くか迷ったが、上甕島でもっとも特徴のあるのは長目の浜の湖沼群と呼ばれる汽水湖の連なった場所と思いそこに向かった。貝池、海鼠池、鎌崎池などが砂州が発達してトンボロ地形を作ってつらなっているところだ。ここを目指したが、道路が分りにくく、いきなり道を迷ってしまった。でも道路の脇は結構良い林でさっそくシフティングを試みると、それなりの量のモリワラジムシが入った。一定の成果があったので、もとの道路に戻り、作戦を変え上甕島と橋でつながっている中甕島にまず行くことに変更した。

上甕島と中甕島とは甕明神大橋と鹿の子大橋で結ばれている。鹿の子大橋で車を止め、海岸に下りていった。すると手ごろな砂利の蓄積があり、ウミベワラジムシが見つかったが、白浜や富山で知られているものに比べて大きい。しかし、非常にすばやく、砂利を数個をつかんで、その中に入ったとしても、私が見るときにはすでにどこかに行ってしまう。何度かこのような失敗を繰り返した後、バット (正確には水切りカゴ) に石ごとすばやく投げ入れることを試みた。バツ

トの底は限られた空間でつるつるなのでこの中にいれ、この中から虫を探し、吸虫管を使って吸うのが効率良いと思い、実際にやってみて何頭かを採集できた。

中甌島に入り平良の集落に入る。ここでは適当な林がないし、港なので特別な種類はいなかった。集落に近くなったためか、携帯に仕事の打ち合わせが入る。集落はずれの林縁で採集をする。ついで標高の高いところをねらい、木の口山の林道に入る。細い道で、かつ、急斜面でミラーを見ながら展望台まで行く。南の島ではヒメフナムシ類が標高の高いところに限られていることに気づいていたので、ここまで来るとひょっとしたらヒメフナムシが採れないかと思ったが、runnerとしての生活のスタイルが酷似し、同じ生態的地位を占めると思われるもモリワラジムシばかりであった。帰り道トンネル前でもう1箇所採集したが、基本的に同じであった。

中甌港に戻り、昼食をとる。スーパーマーケットの2階が食堂になっていて、充実してリーズナブルな価格の定食をとり、午後は東シナ海側に行くことにした。後は海浜だけにいる種類をもう少しほしいと思い、桑乃浦港に行く。

いかにも何かいそうな感じの海岸であったが、タマワラジムシがほとんどで、おまけに蚊がすごかったので、ある程度で切り上げた。

出るべきものが出たのかと思ったのであとは当初の目的の汽水湖群、長め目の浜付近にいった。海鼠池横の田ノ尻展望所にいき、長い砂州を眺めた。歩道を海岸まで降りるが、かなりの高さであ



写真1. 中甌島 鹿の子大橋の下の砂利浜

り、苦労が多かった割にはあまり採れなかった。

中甌港に戻り、ヘゴ自生地北限境界の近くに行った。ヘゴはなかったが、良さそうな照葉樹林であり、ここではほとんど取れなかった。携帯に仕事連絡が入ったが電波が届きにくかったので、里村の港の公衆電話で仕事の連絡をし、海浜性の市の浦キャンプ場へ行ってみる。乾燥した海岸で細かい粒子の砂浜でタマワラジムシだけ。他には端脚目のハマトビムシだけでここも期待はずれであった。

日が西に傾き、下甌島に行く船の時間が迫ってきた。荷造りをし、郵便局で標本を送り、里港付近のスタンドでガソリンを満タンにした。船の直前まで採集をしたがオカダンゴムシばかりであった。船に乗ったときまだ明るさが残っていたが、下甌につくころはすっかり真っ暗になっていた。

下甌島

下甌の長浜港に着いた7時過ぎには西国であっても、すでに真っ暗。あたりの景色が見当たらず、散歩に出ているおばあさんに宿をたずねたがよく分らないで、直接民宿に電話したと、目印が無いとのことで、ご主人に近くまで出ただいて、ようやくたどり着いた。心身共にかなり疲れはてたが、シャワーを浴び、他に客もなく、独りで夕食をとった。

翌朝、レンタカー屋に行き、宿に預けてあった採集道具を積んで、とにかく島の西をめざした。この島は上甌よりもさらに急斜面であった。道が



写真2. 砂利の中の虫を取るバット、実は水切カゴ

良いのは集落の近くだけで、すれ違いが出来ないところも多かった。

口岳の中腹、標高300mあたり、手打の集落へ入る前に車を止めるスペースがあり、うっそうとした林があったので、シフティングを行うとともに、残った落葉の破片や土を集め、つるグレン装置にかけるために送った。次の目的地は海浜性の種類を捜して、片野浦というキャンプ場まで下りたが、予想外に乾燥地なのでたいしたものはいなかった。

次の海岸まで行く途中、谷山のシイ林に行った。すれ違える場所をえらび、車を置いて近くのリターを捜したが結構うっそうとしていたのでモリワラジムシばかりだった。

少し行くとしんきろうの丘と呼ばれる眺望の聞く場所に出た。ここではやや乾燥していたが、落ち葉の下を見ると今まで無かった島毎の種分化の可能性があり、興味深いハヤシワラジムシ属の種類が出てきた。

ついで、海岸に近い瀬々野浦の集落に降りていき、ナポレオン岩が見える前の平展望所からあたりを眺めた。しかし、どこでもモリワラジムシがほとんどでたいしたものも無く、引き上げた。

今度は長浜の街を通り島の北東方面に行ったが、概して道は良いが長い上り坂と下り坂が続いた。小浜トンネルを出たところの待避所が車を止め、ここで下甌で実質最後の採集を行った。案の定まずまずの成果であった。さらに欲を出し、小牟田までいってみたものの、大半が本日お目にかかったものばかり。このくらいの島では半日もあれば普通の種類に出会う。しかし、完全に近づく



写真3. 上甌島 市の浦海岸

には少なくとも1-2年はその島にすまなくてはならないというのが実感である。本来は帰りの時間だが、脇道にそれ、芦浜の海岸に最後の望みを託したが、ほとんどとれなかった。

帰りの船の時刻が近づき、空腹になったので、車を返し、食堂を探したが、近くの食堂はまったく開いていなかった。船の待合所の食堂で手っ取り早く昼食をとり、フェリーの人となった。

串木野新港から路線バスを利用した。終着の鹿児島空港まで1時間半の行程であるが、バスはいろいろな箇所をよるが、客は私一人のみ。鹿児島空港のホテルについた。

翌日午前、鹿児島は3時間ほどの余裕があったのでレンタカーを借りて霧島方面に大急ぎで出かける。ヒメフナムシ類が標高の高いところに限られているが、種分化の問題がおもしろいので、この種に絞って標高の高いところを探した。霧島韓国岳に近い森でヒメフナムシが取れた。この日の収穫はヒメフナムシだけであった。1箇所しか採集できなかったが念願のヒメフナムシが採れた。

残りの1時間で硫黄谷温泉に入ろうとするも11時まで不可との結局、坂本竜馬が新婚旅行に行ったことで有名になった。塩浸温泉に入る。お客さんが少ないのか、お湯の出るところも水しか出ないのだと早計に考えていたところ突然熱湯になり、火傷を負ってしまった。レンタカーを帰し、あわてて、飛行機に飛び乗った。結構ぎりぎり空港に着いたころはまたしても雨、いつもこの空港を通るときは雨にあう。富山に帰ってまた日常生活に戻った。



写真4. 下甌島 しんきろうの丘の林縁。ハヤシワラジムシが生息していた。